一橋基督教青年会会報　第 67 号　目次（2017 年 7 月）

巻　頭　言……理事長　斎藤金義（昭 46 経・48 法）2
寮長挨拶 ……寮長　大城幹雄（3 年　社会学部）3
寮生によるテーマエッセイについて ……編集者　菊岡義洋（2 年　商学部）4
一橋寮にて……北田志聞（1 年　経済学部）5
名古屋では会えなかった人たちと ……高橋正幸（1 年　経済学部）6
自律の契機……川畑輝（2 年　経済学部）7
一年経って……菊岡義洋（2 年　商学部）8
寮で得たもの……星一樹（2 年　法学部）9
蘇る初代寮、発見多き国立農業……前田雄飛（2 年　経済学部）10
YMCA 一橋寮の倫理と民主主義の精神 ……大城幹雄（3 年　社会学部）11
与えるものは与えられる ……川村勇太（3 年　法学部）12
“しか”の中で見えてくるもの……祖根昂大（3 年　法学部）13
YMCA 一橋寮の意志を継ぐ者たち……建内瑛貴（3 年　社会学部）14
ＹＭＣＡ一橋寮での経験 ……三品直輝（3 年　商学部）15
多様性との出会い ……小谷悠樹（4 年　法学部）16
Rising-最後に残せるもの- ……仁藤将史（4 年　経済学部）17
自治寮での生活を通して ……山田哲也（4 年経済学部）18
私　安藤誠と寮との関わり ……安藤誠（経済学部出身）19
ＹＭＣＡ寮の魅力 ……高橋純平（平 29 経）20
中川博道司祭特別聖書研究 ……田村勝裕（平 29 社）21
宮城さんのお話し／マタイの福音書第 16 章 13 節から ……祖根昂大（3 年　法学部）24
YMCA 一橋寮大規模改修計画の概要と進め方 ……26
理事会だより ……30
編集後記 ……編集者　菊岡義洋（2 年　商学部）33

巻　頭　言

―寮の全面増改築に向けて―

理事長　齋 藤 金 義　（昭 46 経・48 法）

昨年来、寮をどのように増改築すべきか、YMCA 一橋寮再建企画委員会なる委員会を発足させて、当初委員長には鈴木望さん、委員長代行に岩谷滋雄さんにお願いし、理事、評議員あるいは会員 OB からなる緩やかな組織において、数度に亘って、議論を尽くしてきた。特に、委員長代行の岩谷さんには、その後、鈴木委員長が郷里に戻られた事情から委員長を辞任されたあと、後任の委員長として精力的かつ誠実に、委員会をリードしてくださり、ようやく、この 6 月の総会において、方向性を打ち出すことが出来たことは大変喜ばしいことであった。この方向性については、岩谷さんが本号において、取りまとめて寄稿されているので、詳細についてはそれをお読みいただくとして、簡単に申し上げれば、田代洋志さんというクリスチャンの設計家に、今後の寮の増改築の基本計画の策定をお願いし、総予算 8 千万円の範囲で、寮生の部屋に作り付け家具を導入すること、シャワー室や洗面所などの水回りを充実させること、食堂なども広く使い勝手を良くすること、チャペル兼講堂のような集会室を新しく増築すること、これらが考え方の基本として、打ち出されたことで、寮生からも OB からも支持されるグランドデザイン、基本設計のイメージを固めることが出来た。この基本設計については、大凡、皆が納得できたことから新しい寮生活や YMCA クラブ活動の夢が一挙に膨らんだことが、何よりも大きな収穫であったと思う。勿論、詳細な設計については、今年度一杯、寮生へのアンケートや施主である当会関係者との綿密な協議によって、さらに練り上げるとして、大枠としての方向性が決まったことは、やはりことが一挙に進むことに繋がる。材質や色や細部の設計、具体的な工事業者の選定などの沢山の作業が未だあるとしても、どんなイメージのものが出来上がるかは、大凡、想像がつくことが、基本設計として大事ななことだと思う。

これに伴い、募金活動は従来の 10 年間での募金というスタンスから、ここ 3 年、2020 年までに一挙に進めなければ、意味がない。多くの会員 OB には 10 年の分割のご寄附も可能との姿勢でお願いしたが、それはそもそも再建それ自体を 10 年の期間で考えていたからであるが、増改築を 2018 年度までに行うことに伴い、寄附もここ２～３年の期間での勝負でなければ意味がないからである。是非、この点をご理解賜り、寄附期間の短縮をお願いしたい。また、これまでどんな寮を再建するか、あるいは増改築するか具体的なプランがない中では、寄附に関してまだ二の足の会員諸兄も多くおられたと思われるが、具体的な寮の増改築プランをこの秋、10 月末にはご提示が可能となったので、寄附のお願いを改めて皆様にお願いしたいと考えている。どうぞ宜しくご協力のほど、お願い申し上げる次第です。

寮長挨拶

３年社会学部　大城幹雄

先日、一橋大学基督教青年会総会が行われました。今年度は、幸いにも幅広い年代層そして多くの先輩方に出席いただき、当会の昨年度の報告と今年度の計画をお伝えする恵まれた機会を持つことができました。諸事情で出席できなかった先輩方も、当会報巻末にあります総会資料をご覧いただき、今日の当寮の動向について知っていただければ幸いです。

さて、今年度で当会は 130 周年を迎えるに至りました。130 年という歴史の今最前線を走る我々寮生の背中を押してくださるのは、偉大な先人たちであり、現在寮生を支えてくださる OB の皆様方であります。我々が今も健やかに寮生活を送ることができることへ皆様方への感謝の念を忘れず、130 周年の歴史ある当会の誇りを忘れずに歩んで参りたいと思います。

しかし、誇りとは何でありましょうか。ただ 130 周年という外形を誇っても意味はありません。「協同友愛の信仰生活を目指して（中略）協同生活を始めた。」と『一橋基督教青年会−百年史−』に書いてありますように、寮生活の起源である「協同友愛の信仰生活」を目指し続けた一世紀以上のエートスこそ誇るべきものでありましょう。たしかに、我々現寮生でクリスチャンがいないことは事実です。しかしながら、毎週の聖書研究を欠かさず行い、聖書に親しみを覚え主体的に学ぶという「信仰生活」そして「寮生は家族」と言い合える関係性、「協同友愛」は今でも不断に受け継がれております。

そして、今年は寮大規模修繕改築にとっては大きな一年となりましょう。施工予定を来年度に控え、日々尽力してくださっている岩谷再建委員長はじめ多くの先輩方に感謝いたします。先輩方の寮への熱い思いに感化され、我々寮生も毎週の寮生会議で再建案について議論しております。来年控える大事業に向け、そして一橋大学基督教青年会の更なる飛躍に向かって、当会会員全体で団結し成功へと導くという決意を強めて参りましょう。

最後に、今年度も我々寮生へのご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

寮生によるテーマエッセイについて

会報担当　商学部２年　菊岡義洋

今回、寮生のテーマエッセイを会報に載せるにあたり、「寮活動を通して得たもの、得たいもの」というテーマで原稿をお願いしました。このテーマでエッセイを考える際、ＹＭＣＡ一橋寮だからこそ得られるものは何か、ということを寮生各自が考えてくれれば幸いだと思い、このテーマに致しました。今年は新たな試みとして看板を作成するなど、例年以上に新歓活動を精力的に行ったものの、新入寮生は２名に留まってしまい決して成功とは言えない結果に終わりました。そのため、来年以降の新歓活動をどうしていくか、また一人暮らしなど他の選択肢と比べた際に浮かび上がってくるＹＭＣＡ一橋寮ならではの良さは何なのか、ということに関して再度考える必要があると思います。また、こうしたことを考えていく中で、自ずと残された寮生活も有意義に過ごそうという気持ちが湧いたならば、それは寮生個々人にとってはもちろん寮全体、延いては来年以降の新歓活動にも良い影響があると思います。

この第６７号会報で各々の寮生が持つ寮に対する思いを寮全体だけでなく、ＯＢの方々とも共有できたなら本当に嬉しい限りです。

一橋寮にて

1年経済学部 北田志聞

何かの縁で一橋大学に入学し、また何かの縁でこの YMCA 一橋寮に入寮してから早くも1ヶ月以上経ち、国立の地にもだんだん慣れてきました。灘校で3年ないし6年ともに暮らした同級生たちはほとんどが関西に残るか東京大学に進学した中、自分はただ一人この一橋大学に入学して大学生活を送っています。最初は心配した友人関係も、同じクラスやサークル(管弦楽団・LaBomba)を中心に話せる友達が出来てきて安心しています。

しかし、これまで 18 年間実家暮らしで親の庇護下で生活していたこともあり、それに伴う色々な問題もこの寮生活で出てきています。そこで今年の会報のテーマ、「寮生活で得たいもの」に繋がるのですが、それを挙げていきたいと思います。

一つ目は、「物事をリマインドする能力」です。元々から宿題の提出率が低いなどこの能力が低かったのですが、寮に入ってまだ1ヶ月しか経っていないもののリマインド不足により何度か寮運営に支障をきたす事態を発生させてしまっています。このことを反省し、与えられた仕事はちゃんとこなすこと、スケジュール管理を正しく行うことを改めて身につけたいと思います。

二つ目は、「教師としての資質」です。僕は大学において教職課程を履修し、将来は教師として働くことも選択肢の一つとして考えています。そのときに、生徒たちにどうやって教え、導いていくかは生徒たちの将来にも関わる大きな問題です。そのときに適切な指導ができるように、その方法や振る舞いを学べたらと思います。このことは寮生活に限ったことではなく、バイトや大学での講義なども関わっていくのですが、この寮にいる教職課程を履修している先輩から吸収できるものはあるでしょうし、また4年間この寮で生活していく中で見つけるものもあると信じています。そこから将来に繋げていけるものがひとつでも残れば、と思います。

最後に、一橋大学、そしてこの YMCA 一橋寮で過ごす4年間が充実したものになることを願います。OB を含めた先輩方、そしてまだ見ぬ後輩たちのみんな、よろしくお願いします。

名古屋では会えなかった人たちと

１年経済学部　高橋正幸

私が所属していた弓道部の同期と、経済学部かつ数学の教員免許が取得できる大学はどこかと話した高２の夏以来、長らく憧れた一橋にこうして通う現状はまだ、少し現実味を欠いていて、５月になった今でもふと「これは夢だろうか。」と思ってしまいます。この夢のような大学生活の半分くらいの時間をこの YMCA 一橋寮で過ごしていくのですが、ここでの日々もまた私の大学生活に華を添えていくのだと確信しています。私は、志望校選択に数学の教員免許が大きく影響したのですが、必ずしも教員になるという意思があったわけではなく、数学の教員免許を取得することができる確率が０でない、数学の教員を目指す選択肢がある環境に魅力を感じたわけであります。私は国家公務員となって国税庁で働き、安定した生活を送ることが現状における最大の目標です。こう書いてみいて私自身でさえ、すこし面白味にかける目標かなとも思いますが、家族やこの先もつのであろう自身の家庭というものについて考えると安定というものはとても大切な要素だと思っています。父親には、この国の未来のためになる人間になれ、と言われたのですが、国よりもまず、自分の家族だというのが私の考えです。国税庁というのは一冊の本の影響によるものでしかありません。この寮には、法曹や政治家を志望する先輩方、院へと進学しさらに研究を深める先輩方、社会へ出て日本のさらなる経済発展を牽引していくのであろう先輩方がたくさんいらっしゃいます。そのような方々と交流することはこの大学に進学した以上可能なことだと思われますが、寝食を共にし、これほど濃密な関係を築けることはこの寮で生活させてもらっているからこそのことです。現在生活を共にしているみなさん、ときどき訪れる OB の方々、一人ひとりが名古屋からここへ来たからこそ出会える人々であり、この巡り合いがこの寮に入寮したからこそ得られる最も価値あるものであると思います。そして、私は巡り合う人々、その人たちとの寮生活から、まだ知らない知識、情報、考え方、価値観を吸収していき、それら、すべてをもってこの先の未来の方向性を決定していくつもりです。その時に今の目標が維持されたならばこの目標は今まで以上に価値あるものになると思いますし、目標が今と違うものになっても、それは今以上に広い視野をもって選んだ選択肢なので結局のところ今以上のものです。学業も知見を広げるための一手段として、ここまで来た以上は精進していこうと思っています。私は上記の通り、出会う人々に期待していますが、自身についてはあきらめているわけではなく、私自身も幅広い分野の本を読むことで、自身を進化させていくつもりです。

書き慣れず、稚拙な文章となってしまったことをお詫び申し上げます。

最後に、これを読んでくださった方々、あらゆる分野での先達としてどうぞよろしくお願いいたします。

自律の契機

2 年経済学部　川畑輝

寮生活を始めてから約半年が経った。というのも、私が寮に越してきたのは前年の10 月である。その分、他の 2 年生に比べ寮生活というものに慣れていないところはあるかもしれない。今年度の会報のテーマは「寮で得たもの、得たいもの」である。寮生活をまだ半年しか経験していない私だが、あえて、ここでは私が寮生活において得たものについて書きたいと思う。私が得たもの。それは自律について考える契機だ。

寮に引っ越してきてから真っ先に感じたことは親の不在だ。掃除や洗濯など、自分の意志で諸々の生活を送らなければいけない。寮生活において私は、自律的であることを求められる。しかし人間いつかは自律性を獲得しなければいけない。自律的な人間が、大人と呼ばれるのだろう。そう考えると、この寮で暮らすということは、私にとってとても貴重な経験である。

では、そもそも自律とはどういうことか。これをはっきりさせなければ、自分の歩いている道が正しいものかどうかわからない。正しいかどうかわからないような道を歩きたくはない。自律という言葉は、対義語である他律と一緒に考えるとわかりやすい。他律とはすなわち、他人に律せられるということである。他人に律せられるとは、自己の行為が他者に統制されていることだ。自律とはその反対である。だから私は、自律とは自己の意志こそが自己の行動原理の究極原因となることだと考えた。

そこで問題なのは上記のような自律は実現可能なのだろうかということだ。私たちが社会に暮らすかぎり、行為の原因に他者が関わることは往々にしてある。私は、自らの意志だけで毎週火曜日に掃除をしているわけでは決してない。私たちが、自分の意志だけで行為した、と言えるようなことなど果たしてあるのだろうか。

しかし、それは私たちが自律性を放棄することを意味しない。確かに上記のような自律は現実的ではなさそうに思える。しかし、それは私たちが自らの意志で行動することなどないという悲観的な結果には帰着しない。自分という存在は自律か他律かの二分法では判断できない。自律か他律かではなく、そのグラデーションなのだ。私たちはそのグラデーションの存在であることを認めなければいけない。そしてその上で、自律性を、自らの意志を尊重しなければならない。自らの意志を自らが尊重する姿勢こそが自律的であると、私はそう考える。

そうした自律性について考える機会をくれた寮にはとても感謝している。これからもいろいろな刺激をもらえる寮生活を大事にしていきたい。

一年経って

２年商学部　菊岡義洋

早いもので私が入寮してから１年の月日が経った。幸いなことに、「この一年間、いったい自分は何をやっていたのか…」という事態にはなっておらず、それなりに充実した１年間を過ごせたように思う。はじめての親元を離れての生活ということもあり、掃除や洗濯などの家事を学業や部活動などと並行しつつこなさなければならなかったが、それなりに出来たように思う。その一方で、受動的にただやらなければいけないことをこなすだけで、自分が得ることの出来た様々な機会を積極的にうまく活用していくことが出来ていないように思う。そして何より、ＹＭＣＡ一橋寮での様々な行事への取り組み方や、そもそもの寮生活といった寮に関連するものはこうした後悔の中心的なものである。今回、新たに一年生を迎えるにあたって新歓活動を行っていく中で、寮生活を行う機会というものはそうそうない、ということを実感した。家族以外の人と暮らすという経験はこの先、かけがえのないものになると思うし、大学という比較的時間のある時にこそ、寮生活をしていくことで得られるものも多いと思う。もちろん、寮といっても様々な形態があり、同じ寮に住んではいるものの、人数が多すぎたり関わりが薄かったりで実際はそれほど人との交流のないものもある。しかし、このＹＭＣＡ一橋寮は人数が大変少ないため、日常生活の中で全員とコミュニケーションをとるだけでなく、様々な寮行事を通して互いに関わっていく機会に恵まれており、いい意味で寮らしい寮のように思える。これは、このさき社会人になったとき必要になるコミュニケーション力を鍛えるのにうってつけの環境だと思う。さらに、海外研修などが寮行事としてあるのは大変魅力的だと思う。そして何よりこの寮と切っても切れない関係にあるものが、毎週火曜日に行われる聖書研究である。聖書やキリスト教など、宗教へのイメージは依然として日本においては決していいものとは言えない。しかしながら、キリスト教は西洋人の考え方に大きく影響しているため、聖書を通してキリスト教を知ることは、学問を学ぶ上でも無駄とは言えない。また、難解な聖書を自分なりに理解し、周りの人に考えを伝えていくのは本来の勉強の在り方であり、これを寮生と共に行える環境があるのは本当に恵まれていると思う。つまるところ、これからの寮生活で得たいものとしては主に３点ある。１つ目は、日常生活の中でもっと寮生と関わり、社交性を身につけていくこと。２つ目は、海外研修などの寮行事にもっと意欲的になり、自分の視野を広げること。３つ目は、この寮を出た後では、こう恵まれた環境で学ぶことは出来ないのだから、もっと聖書に積極的な態度で関わっていき、聖書への理解を深めると共に、その過程で思考訓練をしていくことである。これら３点を意識しつつ、せっかくの恵まれた寮生活を後悔のないように楽しく過ごしていきたい。

寮で得たもの

２年法学部　星一樹

一橋大学に入学してから一年が過ぎました。と同時に寮に入って一年が過ぎました。二年生になったという実感がなく、まだ一年生の気分です。

昨年一年間、寮で生活をしました。初めての長期共同生活、初めての大学、初めての聖書研究、と初めて尽くしでかなり戸惑うところがありましたが、早く慣れよう、適応しようということを心がけた一年でした。

寮では、一年生として買い出しや先輩方の仕事を学ぶ、など寮生活になじんでいく中で、徐々にではありますが寮生の中で少し絆が芽生え始めました。それを痛烈に感じたのはやはり四年生を見送るときでした。田村さん、同じ緑班として一緒に活動することも多く、お世話になりました。大崎さん、自分と考え方が似ていて、話しているとかなり見識が広まりました。純平さん、かなり恋愛の話をしました。いろんなネタをもっている人でした。二瓶さん、自分が落ち込んでいるときにやさしく声をかけてくださったのは忘れません。個性的な四年生がいなくなる時、自然と胸が熱くなりました。もう会えなくなる、そう考えたらかなり切なかったです。

以前までは高校の部活の先輩や同期など、会えなくなると思った時でもそこまで切なくなることはなかったのですが、一緒に生活をする、ということを通して無意識ではありましたが深い交友関係が築かれていたんだと思います。

この一年間でおもいました。大学はいろんな人がいて、たくさんの人がいる。確かに人脈を広げようと思えば広げられると思います。しかし、高校やそれまでに比べ、ものすごく広いけど浅い交友関係になってしまう。そう思いました。今でも遊んだり、ご飯に行ったりするクラスメイトはたった一人。一方、高校までの友達は数多く今でも会っています。そんな中で、寮という関係は同じ大学の人たちと深い関係を築くいい場所だと本当に思いました。せっかく寮に入りました。一年生も加わり、改めて寮生と助け合いながら、しっかりとした共同生活を通して、より交流を深められたらいいと思います。

蘇る初代寮、発見多き国立農業

２年経済学部　前田雄飛

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。」（松尾芭蕉,奥の細道）

何もしなくても月日はただ過ぎるばかりで、昨年は誠に恥ずかしながら自身は何も成長しなかったような気がします。学業成績は超低空飛行で、なおかつ未だに大学で学びたいことを見つけられずにいるのです。成長したことを無理に挙げるとすれば、トランペットが少し上達したことくらいでしょう。しかし、今年はただ遊びほうけるのではなく、遊びも勉強も、そして YMCA 活動も充実させる一年にすることをこの会報をもって YMCA 一橋寮に関わる皆様にお約束をします。

さて、皆さまは去年の私の会報の内容を覚えていらっしゃいますでしょうか。そこには寮の庭の荒れ地を開墾してサツマイモを栽培する、といった内容の文章を書いていたのですが、結局その年は実行に移せずに新しい年を迎えることとなりました。理由は作物栽培を思いつき、会報にそのことを書いた時にはもう既にサツマイモ他多くの作物の植え付けシーズンが終わっていたためです。作物栽培は天候などの自然と向き合うことであるというのをひしひしと感じただけでなく、暦を軸にしっかりと計画を立てるのが大事なのだと学びました。今年はそのような失敗を犯すまいと事前から計画を立てており、庭の草刈りを早々に終えた後、昨日大城幹雄寮長（３年　社会）とともに実行に及んだわけですが、寮の庭を掘ってみると色々なものが出てくるわけです。角の取れた丸い石からは国立が過去に多摩川によって形成された土地であることが見て取れますし、木でできた柄の部分が腐り錆びた刃だけが残った鎌や鉈を見つけると、当時の寮生も現在と変わらず皆で草刈りをしていたことを知ることができます。初代寮の外壁や屋根瓦と思われるレンガなども発掘され、５ｍ四方程度を掘っただけにもかかわらず様々な寮の歴史に触れることができ、古代遺跡を発掘する考古学者のような気持ちになることができました。

今後のガーデニングの計画は雑草の根や石を取り除いた後、畝を設け雑草防止や土壌温度を保つ役割のマルチというビニールを畝に張り、苗を植えるわけですが、すべて手作業で行うため狭い畑といえども楽な作業ではなく、農業従事者の大変さがわかります。11 月の収穫期を迎えるために今後努力するとともに、父なる神に豊作を祈り、母なる自然と正面から向き会いたいと思います。

YMCA 一橋寮の倫理と民主主義の精神

3 年社会学部　大城幹雄

この寮に来て早くも二年が経過し、本年度この歴史ある寮の寮長を務めることができるのを心から誇りに思う。そして残念なお知らせだが、これから私のエッセイ（略してワイ倫）にお付き合い願いたい。

テーマは「当寮で得たもの、得たいもの」についてだが、その真意は「当寮だからこそ得られたもの、得たいと思えるもの」ということであろう。本エッセイでは「得たもの」について書いていく。ずばり YMCA 一橋寮の特異点は一橋大学では珍しい自治寮だということである。そして、私の結論は「当寮だからこそ民主主義の精神を学ぶことができた」ということである。

小平の国際寮や中和寮など一橋には多く寮が存在するが、学生の自治で運営されている寮は私の知る限り YMCA 一橋寮だけである。世界中の諸国が人口の大きさのため間接民主制を採っているのが現状だが、寮生十数名のこの小さな寮では寮生会議における寮生全員の合意のもと自治が行われる直接民主制を採っている。これこそ、ギリシャで産まれた民主主義の原初形態であり、ルソーが讃えた「真の民主主義」である。一方、アリストテレスは民主主義を衆愚政治と愚弄したそうだが、深い教養と理性を備えた我々が愚衆ではないことはまったく明らかなことである。そもそも民主主義とは、集団的意思決定にその集団の全成員の意思決定が反映されている状態を目指す発想である。ならば、我々が直接参加し合意を目指す寮生会議は「真の民主主義」の体現と言えるのではないか。

社会に出れば、会社の会議や家族会議、政治家を目指す人ならば国会で、誰もが政治を経験することになると思う。政治は、知らないおじさんたちが我々から離れたどこか遠い世界で行われるものではない。我々が集団として生きていく限り、意見集約機能としての政治から逃れることはできない。その際、我々はこの寮で体現してきた民主主義の精神（直接参加と合意型民主制）を忘れてはならない。少数者の意見を排するのは容易いが、一つ想像してほしい。この寮でたった一人の少数者としてその意思を自治に反映できなかったならば、寮生活がいかに苦しいものになるか。寮生が各々の「より良く住む」権利を尊重しあい合意を目指し、時には深夜まで寮生会議を延長したことは無駄ではなかったはずだ。（一方、国会は会期中に法案を可決しなければ、審議未了で廃案だ。）私に限った話ではない。我々が寮生活で得られたものは民主主義の精神である。（しかし、YMCA の倫理と民主主義の精神の連関どころか、 YM の倫理さえ書けなかったことは心残りである。）

与えるものは与えられる

3年法学部　川村勇太

今年も、寮の会報を書くこの時期がやってきた。私にとって3回目となる今回の寮生寄稿のテーマは「寮生活を通して得たこと・得たいこと」ということで、折り返しを迎えた大学生活前半の2年で、何を学んできたのかを振り返りながら、これからの2年で何を得ていくのか、そしてそれをどう生かしていくのかについて書いていきたい。

一昨年、大学入学と同時に上京し、YM寮に入寮して、様々な出会いや経験を得ることができた。それは、これまで読むことのなかった、そしてYM寮に入っていなければおそらく一生手に取ることのなかった聖書との出会いであり、大企業や省庁でご活躍された先輩方との出会いであり、そして様々なバックグラウンドを持ち、個性豊かで、それでいて兄弟のように親しむことのできる寮生たちとの出会いである。大学という、ともすれば薄い人間関係しか築くことができない世界の中で、聖書を通じた考えのやり取りをしたり、ともに一つの目標に向かって協力しあったりする仲間を得ることができたのは何にも代えられない財産であると思う。日頃の生活や寮の季節行事を通した仲間とのふれあい、中国研修での大きな試練を共に乗り越えた経験も、寮に入っていなければ得ることのできなかった経験のひとつだと思う。

これからの2年は幹部や監事として、寮全体をリードしたり、見守ったりする立場になっていく。そうした責任ある仕事をしていくにあたって、もちろん、集団の中でリーダーシップを発揮する経験や、集団の代表として対外的な折衝を担当するなどといった経験を得られることは、自分にとっても大きな財産になると思う。しかし、それ以上に、これまで得てきたことを寮や後輩のために生かし、引き継いでいくことに、使命感をもって取り組んでいきたい。

現在私たちの寮は、老朽化対策として、ハード面の再建計画が着々と進められている。設備担当の私にとって、内部からこうした計画に携わることができるのは得難い経験であり、自分の仕事をしっかりとこなすことに加え、この貴重な経験を自分たちの代だけでとどめることなく、しっかりと引き継いでいきたい。今回の再建が完成するのはおそらく私たちが卒寮した後になり、私たちが（物質的な意味で）その恩恵を受けることはあまりないと思う。だからこそ、私たちが聖書で学ぶ「与えるものは与えられる」の精神で、自分のためでない仕事にこそやりがいと使命感をもって取り組み、その中から得られるものを大事にしていきたいと思う。

“しか”の中で見えてくるもの

３年法学部　祖根昂大

今年の会報のテーマは、「寮活動を通して得たもの、得たいもの」というものである。YMCA 一橋寮は、間違いなく様々な初体験が詰まった素敵な住処だと思う。全国各地から、いや、世界中から集まった個性の塊のような仲間達との共同生活・キリスト教との出逢い・国内の他大の学生や海外の学生との積極的な交流。これらは一人暮らしをしている者はもちろん、その辺の学生寮に住んでいる者には決して得られない貴重な経験だと思う。

ところで、私は今年度 3 回生となった。つまり、大学生活のちょうど折り返し地点に辿り着いた、ということであり、同時に、寮生活の折り返し地点に辿り着いた、ということである。さて、大学生活の、寮生活の後半戦が始まった矢先に、今回の会報のテーマである。自分が大学生活の半分の時間を費やし得たものを確認し、残りの半分を懸けて何を得るべきなのかを考えるには、願ってもない良い機会である。

まずは、入寮時の自分を振り返り、今の自分と比較することで、私が入寮してからの 2 年間で何を得たのかを確認したい。2 年前の今、私は会報に載せるエッセイを書いていた。「成長」、これがそのエッセイのタイトルであった。入寮時、私は成長をテーマに大学生活を送ろうと決めたのである。その決心の下、私は様々なことに挑戦をした。生まれて初めてサッカー以外のスポーツをし（結局、サッカーが一番面白いと気付きすぐに辞めてしまったが）、初対面の他大の学 Y と共に農業体験をし、初めて海外に行き現地の学生と交流をし、そして幹部として寮の運営に携わった。これらは、サッカーと勉強しかしてこなかった自分にとって、とても新鮮な経験であった。そこで私は、多くのものを得、成長できたと思う。具体的なものではない。しかし、確かに人間的に成長し、今後の生活の糧を得たと確信している。今の自分は、2 年前の自分とは一回りも二回りも大きな人間になった。

先に述べたが、私の大学生活は後半戦が既に始まっている。「あと、2 年しかない。だが、2 年もある」、こんな表現がある。しかし、この表現は実に陳腐なものである。2 年は短い。2 年は“しか”である。私は、入寮時の自分に顔向けできるよう、この非情な程短い 2 年で、さらなる成長をしなければならないのだ。

では、何を得れば成長できるのか。これが今回の会報の後半のテーマであることは、上記の通りである。しかし、これは答えるが難しい問であろう。入寮時とは異なり、様々なことをがむしゃらに経験する時間はもう残されていないからである。効率的に、的確な経験をし、自身の成長に繋げなければならない。だから、今はこう言うのみに留めさせていただきたい。「過去の自分に恥じない行動を重ねる。現在の自分を見つめ直す。未来の自分を思い描く。そうして、考えながら生活していれば自ずと得るべきものが見えてくる。そして 2 年後、私は今の自分より大きく成長しているだろう。」、と。

YMCA 一橋寮の意志を継ぐ者たち

3 年社会学部　建内瑛貴

今までの寮生活を振り返り気が付くと、もうすでに半分以上の寮生活が終わっていた。過ぎ去っていった寮生活は早かったようにも感じたが、実にいろいろなことを学ばしていただいた非常に濃いかつ貴重な寮生活でもあった。入寮当初、右も左も分からなかった自分は、直接の先輩にあたる寮生の方々から多くのことを学んだ。それは、正しい日本語の使い方であったり、今まで知らなかった日本の文化についてであったり、日本人とのコミュニケーションの取り方であったり、日本で生活するうえでの必要なことをすべて教わったような気がする。何よりも、うれしかったのは他の寮生とは異色の経歴を持つ自分を寮生の一員として温かく受け入れてくれたことであった。最初は価値観の違いで先輩方とよく衝突したり、反発したりして、迷惑をたくさんかけてしまったこともたくさんあったが、その時に取った行動や経験が今の私の寮生としてあるべき姿を形成してくれたと信じている。先輩方と日々関わってきたことで、私は人間的にも大きく成長できたと思うし、日本社会での生き方を学んだ。だが、先輩方から受け継いだものはそれだけではない。実は知らないうちに、「一橋寮の意志」というものも受け継いでいたことに最近気づいた。寮の意志というのは、今までの先輩方が必至に守ってきた一橋寮の伝統や歴史を守りたいという心からの思いであった。入寮当初は寮に対して、何の愛着もなかったのに、寮生と共に生活をしていくうちに居心地よさのような感情を抱き、自分の中では第２の家となったといってもいいぐらい、今はこの寮が好きだ。この寮の一員であることを本当に誇りに思う。今の YMCA 一橋寮での自分を作り上げてくれた先輩の方々には恩を返しきれないほど感謝しているし、寮生との出会いがなければ、今の自分は存在しないであろう。そういう意味でもこの寮は私にとって大きな原点でもあり、今までの人生の中で最も成長させてくれた場所でもある。

上級生になった今、自分が先輩を尊敬していたように、後輩からも尊敬されるような存在になりたいと思っている。それが、今寮生である自分の目標として掲げているものである。そのためにも「一橋寮の意志」を後輩にしっかりと受け継ぐ必要性がある。私がかつて先輩方から寮の意志を受け継いだように、私も先輩方の思いを受け継ぎ、その思いを次世代につなぐ義務がある。今までの歴代の先輩方が作り上げ、守ってきた寮の意志を受け継いだ私のように、これからも「寮の意志」を受け継ぐものが現れることを期待したい。

ＹＭＣＡ一橋寮での経験

３年商学部　三品直輝

この YMCA 寮に入ったことで私に一番影響を与えたことは何だろうか。私は入学前にこの寮に住むか一人暮らしをするかを迷っていたが、私の生き方はその時の選択で全く異なるものになっていると思う。それはこの寮だったからこその経験がいくつも浮かぶからだ。一橋大学で 16 人。このある種特異な寮で私が得たものを大学生活も折り返しを迎えた今、振り返って考えたい。

この寮での経験で特に貴重だったと思うものが 3 つある。海外研修、寮生との付き合い、キリスト教との関りである。海外研修は寮生活の中で最も印象に残った経験だ。昨年は寮生 4 名で香港とシンガポールを訪れ、企業ではその会社の概要やアジアの金融情勢について話を聞き、大学では YMCA の方々に活動内容をプレゼンテーションで交換した。金融については専攻でもなく知識に欠けており、英語力も不安が多かったためこのままではいけない、という思いを痛感することとなった。しかし、そもそも海外に行ったことのなかった私は街を見るだけでも衝撃は大きかった。シンガポールがあのように栄えていて綺麗な町かと思うと、香港で見た貧困街は小汚い建物が密集していた。日本だけにずっといては見られない光景であった。

寮生との付き合いは日常のことではあるが私にとって最も大事にしたい経験だと考えている。一緒に住んで何気なく食堂で話をすることは寮ならではのことだし、YMCA 一橋寮の 16 人というこじんまり感が私は気に入っている。また私は周りに恵まれていて、先輩方にはお世話になった。彼らに倣い後輩に接することが上級生としてこれからいっそう求められるのだと思う。

この YMCA 寮に入ったことで私に一番影響を与えたことは何だろうか。はじめにもったいぶってこのように書いたが、それはやはりキリスト教との関りである。入学前、私は神を本気で信じる行為が理解できず、宗教は例外なく怖くて危ないと思い込んでいた。一人暮らしと迷っていたのも実は聖書研究が原因であった。しかし今はどうか。聖書研究を続けて私は宗教に関して寛容になれたと思うし、キリスト教の精神には共感する部分も非常に多い。また、私は聖書を通して見ることができないもの、確かめることができないものを信じるという考え方も肯定的に学べた。自分がここまで変わるとは正直思わなかった。これはこの寮だからできた経験である。私が YMCA 一橋寮に住んだが故に経験できるこの機会をあと 2 年間大事にして、より深めていきたい。

多様性との出会い

４年法学部　小谷悠樹

今年も会報の文章を書く時がやってきました。二年生時には会報の編集という大役を任され会報恐怖症（？）にもなりかけましたが、少なくとも現寮生として会報の文章を書くのはこれが最後だろうと思うと、やはり寂しい気持ちにならないこともないです。

今年のテーマは「YMCA 活動と人生」ですのでそれに即して書きます。しかし正直なところ、僕は YMCA 活動に積極的に参加したかと言われると否といわなければなりません。もちろん聖書研究には休みなく参加しましたし、寮の業務は滞りなく行ったはずです。しかし、三年の大城君のように聖書の教義を深く理解しようと邁進し足繁く教会に通うことも、学 Y のイベントに進んで参加することもありませんでした。とはいえ寮生活を通して得たものがなかったわけではありません。寧ろ寮を選んで良かったと思える点は無数にあります。その中でも今回は「多様性」という語を軸に二点挙げたいと思います。

一つ目はやはり色々な人との出会い、人的多様性です。もちろん寮生は全員一橋の男子大学生であるし、学部が違うといっても精々四種類です。しかしながらこれまでのバックグラウンドが大きく異なる人たちとほぼ寝食を共にするような形で付き合うというのは、間違いなく希有な体験です。僕はこれまで私立の幼稚園に小学校、そして私立高校に附属の中学校から高校へといわば限られた世界で生きてきました。付き合う人間に変化があるわけでもなく（高校の友人はそれ即ち中学の友人です）、京都から出ることもなく…。そんな僕が様々な出自（時には海外）を持つ人たちと寮生活を送るのですから刺激がないわけはありません。また寮の業務や聖研を通してそのような人達の考えを知り、共に何かを作っていくということで、人間的な寛容性や許容性が上がったように感じます。それを証拠に一年生の夏に短期語学留学したニュージーランドではホームステイ先でやっていけるか？という不安を感じたりもしましたが、今年の二月に行ったグアテマラ・ホンジュラスではホームステイ先でも週末の一人での旅行先でも全くといっていいほど不安や寂しさを感じず、先進国と違う人・物・考えを笑って受け入れることができるようになっていました（単純に異文化への慣れなのかもしれませんが）。

二つ目は宗教的多様性です。というのも、僕の家は日蓮宗を信奉する家でしたが、幼稚園・小学校はカトリックの学校でしたし、中高は真言宗の学校でした。YMCA というプロテスタント系の場所で聖研、時には教会に行けたことでまた一つ宗教的多様性に触れることができました。小学校の時によく歌った歌が此処では全く歌われない（だいたいそういう歌にはマリアというワードが入っているのです）ことに衝撃を覚えたものです。

というわけで寮生活を含めた三年ちょっとは多様性に触れることの連続でした。この経験はこれから先でも役に立つということを僕は確信しています。どんな人、どんな考えに出会っても受け入れて上手くやっていく、それが YMCA 活動で得た最たるものだと僕は思っています。

Rising-最後に残せるもの-

４年経済学部　仁藤将史

私は最高学年ではあるが敢えて「寮生活で得たいもの」という題で書こうと思う。一年生のとき、私にとって最高学年としての仰ぎ見る四年生はとにかく学生として完成された存在で憧れの対象であった。しかし、いざ自分が実際最高学年になり寮生を導くような立場になってみると先人と同じように憧れられる領域に達したとはとても思えない。それどころか下級生・寮母さんといった周囲の人々に助けられてばかりの状態で与えられる以上のものを還元できないでいる状態である。特に去年寮長を拝命した一年間は特に寮生・寮母・理事会の方々の寛大さに甘える日々が続いた。

幹部在任中は「先輩方のように上手く処理しなければ」という焦燥感が強かったが幹部業務を終えた昨今心境に変化が訪れる。尊敬していた先輩方も寮から巣立つときに周囲の人への感謝を述べていたことを思い出し、先輩方も自分と同じように他人に迷惑を掛けながら切磋琢磨し成長していったことに気がついたわけである。この発見はまさしく天啓であり学生生活はまだ終わったわけではないが、学生生活を通して得られる中で大変貴重なものの１つであることは間違いない。

唐突だが師弟関係を表す言葉に「守離破」という言葉がある。物事を学ぶとき先人の模倣から入り慣れてきたら師の教えから離れ独自のアレンジを加えて自己流へと昇華する過程を表している。この言葉を大学生活に当てはめて振り返ってみると私の場合、下級生の時は「守」、前述の時は発見ができた時「離」であり、過去を振り返る余裕の出来た現在は「破」の段階であると言えるだろう。目標としてきた人たちと同じ方法ではなく、自分なりのやり方で先輩像を示していくことが、自分が今までお手本としてきた先輩方や周囲の人々から様々なことを教えて頂いたことに報いる方法である。三月に行われた予選会で先輩が仰っていた「先輩から受け取ったものは先輩に返すのではなく、後輩たちに託していくことが重要」という言葉の意味の奥深さに今更ながら噛みしめているわけである。

最後に自分にとっての残された一年間の学生生活とは先人のやり方の踏襲に留まるのではなく、自分なりのやり方を確立するとともに、渡されたバトンを後輩たちに受け継ぐことでお世話になった方々への恩を返す時であると総括できる。そして、他では経験・体験できない広い意味での「学び」を提供してくれた寮生活と周囲の人たちに対して感謝の言葉をこの場を借りて述べて筆をおくこととしたい。

自治寮での生活を通して

４年経済学部　山田哲也

時が経つのは早いもので、入寮してから既に３年以上が経過しました。１年生のころにはあれほど大きく見えていた先輩方の背中があったのですが、今自分がその立場に立っていると考えると改めて身が引き締まる思いです。このような自らの行いと寮に対する振り返りの機会を与えてくれるのは会報を書く一つのメリットだと思います。さて、この寮の生活で得られたものとしては、近さ、安さ、寮食…というのはさておき、先輩後輩が一つ屋根の下で暮らすことによる信頼関係や、キリスト教との関わりを通して得られる多様性への理解がまず挙げられます。ただ今回の会報はそれではなく、一通りの役職を経験して感じた自治寮ならではの魅力、私が思うに「自らが試行錯誤して組織を変革していける環境」と「４年生としてできること」について書き連ねていきます。

自治寮とは今や聞きなれた言葉ですが、そこで暮らす意義を考えると非常に深いものがあります。寮生が寮という一大組織の運営を行っているということで、組織として意思決定が早く、また柔軟に行えると考えます。もちろん我々の YMCA 一橋寮は寮生だけの力で動いているわけではなく、寮母さんや OB の方々のお力添えがあった上で成り立っており、そういった意味での責任があることは重々承知しています。ただ、学生の意見が柔軟に寮全体に通り、試行錯誤され、そして見直され、よりよいものへと変化させていけることはかなり有用な経験でしょう。学生でありながらこれだけの組織に対して皆が対等に影響力を持つことができ、動かしていけるチャンスがあるのは我が寮ならではの魅力です。そのような中で私がしてきたことと言えば、会計の仕事の最適化といったことくらいであまり寮生の生活には密接には関わっていないのですが、寮生の生活を裏側からサポートし、また公益法人化に伴い（半ば受動的ではありますが）様々な変更を経験しました。小さいながらも過去の問題を修復し、今後に繋がるように改善してきました。こういった経験が出来たのもこの寮だからだと感じています。周りを見渡してみると寮生の中にもチャレンジ精神にあふれた者は数多くおり、ルールの改正や新たな寮内サークルの発足などが今年も起こっています。是非今後もこのような自治寮の強みを享受していって欲しいです。

私自身はあと半年強しかこの寮に居られないのは非常に寂しいですが、現在は上記の利点を活かすべく何ができるかを自問自答しています。最重要だと考えるのは「引き継ぎ」で、現状の維持に留まらず後代に更なる改良をしてもらうべく、現状自分が持っている全てを託せればと考えています。これはなぜ４年が監事として寮に残るかの理由だとも考えており、丸１年を幹部を始めとした後輩への引き継ぎ・伴走だと納得しています。このような意識を持ちながら、残りの寮生活を後悔することなく送ります。

私　安藤誠と寮との関わり

経済学部出身　安藤　誠（旧姓：瀧　誠）

皆さまこんにちは、安藤誠でございます、各ご先輩方、また、各元後輩にしてご先輩方々の前でこのように塵芥にすぎない私がこうして会報に寄稿させていただけることに感謝致します。

さて、安藤誠という名前にも皆さん見慣れないことと思います。まず先にお話しさせていただくと、2004 年にＹＭＣＡ一橋寮に入寮させていただいた折には瀧　誠と名乗っておりました。卒寮の後、結婚では未来永劫全くありませんが家庭の都合により、姓が変わり現在は安藤を名乗っております。寮の関係者含め先輩後輩友人においても、そこまで重要なこととは自分自身捉えて来なかったため、特段話す機会を設けたりなどといったことはしてきませんでした。今でも寮の後輩はじめ親しい方々には瀧と呼んでもらっていることも多いため安藤でも瀧でもアンディーでもご自由に呼んでいただいて構いません。

私安藤誠は平成 16 年に一橋大学に入学し、縁あってＹＭＣＡ一橋寮に入寮させていただきました。その後三年次には会計係を担当させていただき、四年後、無事に寮を卒寮、一方無事とはいかなかった学業の方はといえば、その後も残された学部単位を取得するべく五年生、六年生・・ｎ年生・・ｎ＋１年生・・φ年生と私の虚しい挑戦は続いていきました。その甲斐あって八年目終了までに単位の取得成らなかった私は無事一橋大学を中退となり、その後はアルバイトにて生計を立て、国立で日々を過ごしてきました。卒寮後も寂しさ故かついつい寮に顔を出すことが多く、聖書研究にも参加をさせていただいたり、クリスマス会や追い出しコンパにも参加をさせていただいたり、また日常でも現寮生にも食事や飲みに付き合っていただいたり、麻雀やサッカーやスノーボードであったりといったいわば「変なオジサンのわがまま」に付き合っていただき感謝の念しかありません。また氏家寮母さんのご厚意から事前に来寮することがわかっている日には寮食もご提供いただき、四畳一間の部屋でミイラとならずに今日まで来られたのは氏家寮母さんのおかげと言っても過言ではありません。

そのように卒寮してから今日に到るまでののんべんだらりとした日々を過ごしてきた私ではありますがこの度、齋藤理事長より、公益財団法人化に伴う常任職員としての打診という身に余るお話をいただき、私を廃人の危機から救ってくれた寮に対して何かをできるだけの自身も能力もないと自分では自負しておりますが何か寮の一助とでもなれるのであれば、いささか役不足とは存じますがもしご承認をいただけるようであれば、できうる限りの全力を寮のために尽くさせていただきたいと思っております。

ＹＭＣＡ寮の魅力

平成２９年度卒　経済学部　高橋純平

今年の三月に卒寮をし、東北の地で新たな生活を始めて一か月ほど経った。新たな宿舎は会社が用意してくださった寮である。新しい寮生活をしていく中で、大学時代を過ごした我がＹＭＣＡ一橋寮の特色や魅力というものも再発見することが出来た。本稿では、現在の寮生活を通して浮かび上がってくる「ＹＭＣＡ一橋寮の魅力」について執筆する。

第一に挙げられるＹＭＣＡ一橋寮の魅力は、「寮生の距離の近さ」である。現在、会社の寮に住んでいるが、寮生との交流は個人的なものを除くと月に一度行われる集会だけである。それに比べると、ＹＭＣＡ寮の寮生との交流機会というものは非常に多い。毎週火曜日の聖書研究においては、聖書を題材に自由闊達に寮生の意見交換が行われ、寮生の密な交流が図られている。火曜日の聖書研究後には寮生会議が開かれ、寮生の情報共有が図られている。それ以外にも、色分けされている班ごとに定期に開かれる草刈や、不定期で開かれる飲み会等で寮生での交流が図られている。

第二に、「理事会を含めた寮ＯＢとの交流」が挙げられる。ＹＭＣＡ寮は、ほかの寮に比べて、縦のつながりが密である。寮ＯＢにより形成された理事会を始め、寮には卒寮された方々が頻繁に顔を出しており、現寮生は、寮ＯＢとの交流する機会は豊富に用意されている。この寮の縦のコミュニティーを通じて、学生のうちには見えにくい社会の様子をうかがうことが出来、自身のキャリアを考える際に大いに参考になる。

第三に、「優秀な人材がそろっている点」が挙げられる。寮生はみな一橋大学に在籍している学生であり、最難関の一つである入試を突破してきた人々で形成されているため、そのような知的水準が高い集団にもまれて四年間過ごすことで、自分の知的水準も自然と上昇する。そのような、知的水準を上げるという観点でも魅力的である。その一方で、たびたび開催される飲み会等のイベントを通じて、真剣に馬鹿なことにも取り組むことで、ただ勉強だけができる人ではなく、人と円滑にコミュニケーションをとるうえで必要なスキルも身に付けることが出来る。現在の寮においても優秀な方々や尊敬できる方はいらっしゃるが、その質などをかんがみるとＹＭＣＡ寮で過ごした寮生は貴重なメンバーであったことを実感する。

以上の「寮生の距離の近さ」「理事会を含めた寮ＯＢとの交流」「優秀な人材がそろっている点」の三点が、「ＹＭＣＡ一橋寮の魅力」だと思う。人生の夏休みと言われる大学生の期間をそのような魅力たっぷりのＹＭＣＡ寮で過ごすことが出来て、大変光栄であるし、これからも発展していくことを願っている。

中川博道司祭特別聖書研究

田村勝裕（平２９　社）

1. 日時：2016 年 12 月 6 日(火)　19 時～21 時
2. 場所：YMCA 一橋寮　1 階食堂
3. 出席者：YMCA 寮生、寮母、斎藤金義理事長、中川博道司祭
4. ご紹介：カルメル修道会司祭、北海道出身。1975 年カルメル修道会入会。1984 年司祭叙階。
5. 議題：キリスト教の根底を流れるもの。

・時代、民族を超えて共通するもの

パレスチナのカルメル山で開かれたのがカルメル修道会。約 800 年の歴史がある。Contemplation＝神と共に人生の根底を探る。これを基盤にして生活を営んでいる。信徒は 4 万人。2007 年にインドでアジア地域の会議があった。1 か月くらいの会議。こんな長いかつ多様な民族、違うコンテキストで生きる人と話し合う中で、人類の普遍的なものは何だろうと常に考えていた。その共通項は、キリストの肉を食べ、血を飲む、即ちイエスの「私を食べて生きなさい」という言葉は皆共通して持っているということである。その事を会議を通してハッと悟った。カトリック＝普遍的という意味がある。人類に普遍的なものを探る、思いめぐらすのがカトリック。

ある女性との出会い。自分がここまで育てるのにかかった費用を計算しそのあまりの大きさに愕然とし、「親を二度か三度食べたみたい」という言葉から、生かされることはどのようなものか再度思い直した。親の苦労や時間を食べさせてもらうことで生かされてきた。

誰かの労力、時間、死の上に立って生きているという事を、インドでの会議、女性との出会いで思い直すに至った。

・旧約聖書から見える人間の問題性。

聖書は、時代や民族を超えて共通なものを指示している。それを今日お話ししたい。

資本主義のシステムの次に来るものは、互いを思い合い共に生活するシステムと同志社大学のある先生は言っていた。問題性から抜け出て、本当の解決策がある生活へ移行するにはどうしたらいいか、それを示しているのが聖書。聖書のライトモチーフは、過ぎ越し、即ち出エジプトである。出エジプトの問題は次の 3 つ。①エジプト王の恐れとそれに端を発するヘブライ人への嫌悪・虐待。これは現代でも実際に起こっている。EU の移民への不満や、アメリカのメキシコ人など移民への嫌悪。②未来への恐れ。これも現代の問題である。例えば日本や中国の少子化問題。実際には年間 7500 万人の新生児が誕生するはずなのに、現在の生活を維持する為、堕胎しているのが現在の日本の現状。

③仲間内の恐れといじめ。エジプト人から迫害されてきたヘブライ人同士が嫌悪しあい虐待しあう。以上の 3 つが罪＝人間の問題性とされる。
罪の語源の一つは、関係性の断絶。存在のゆがみ。
恐らく出エジプト記を通して、古代ヘブライ人は、関係が壊れ、断絶し、人の生き方が歪んでいくことが人間の問題性＝罪であると定めている。
創世記での神学的な関係性とは、人間は根本的に 3 つの関係性で生きている。①神との関係性、②人との関係性、③世界(地球)との関係性。この 3 つの関係性がうまく成り立って人間として成り立つ。この中の 1 つだけが充足しても、残り 2 つが充足しなければ豊かな人生はあり得ない。(神を信じ、よく祈っても隣人にやさしくしないなど。)

・聖書の中の神、イエスとは何者か
私を洗礼してくれたドイツ人司祭の印象的な言葉：信じ込んだら救われない。よく考える事が大切。人は自分を知った程度に神を知る。自分の根を掘り起こすことが神を知ることにつながる。聖書に出てくる栄光とは、いわば在庫証明書のようなものである。即ち、現品は見えないけど何があるかわかる。イエスの人生が、イエスが十字架にかかったことが神の栄光を表している。モーセと神のやり取り：出エジプト記 3 章 14 節。神が初めて名(エフィエ・アシェル・エフィエ、”I am who I am”)を名乗っている。名を名乗るとは単なるあれとこれの区別ではなく、人格への窓口となる大変重要なもの。私は必ずあなたといる。いつも自分と共に在ってすべてを受け入れてくれる神に感謝する。
出エジプト記 34 章にて、イスラエルの民はモーセが知る前に偶像崇拝に手を出した。これに対して神は「34 章 6 節 7 節を参照」と語った。即ちいつでも一緒にいて、憐れんでくれ、道を外れそうなときは罰し、人に関わり続けるのが神の本質。
イエスの自覚＝多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来た。人の子＝人間の儚さや、神の前での人間の小ささ、また死に定められた罪人としての姿。水のようにどこまでも低いところへ下り、ふれるものすべてを清め、自らが汚れ、下りきった時に汚水として捨てられる生き方。
・結び
私たちが探しているものは何なのか：自分を正しく認め、かつ愛してくれるもの。
人間とは自分がありのままに認められることを求めている。受容とは私と共に生活している者が、私に敬意をもっていることを感じさせ、私に価値あることを感じさせてくれることである。イエスの教えの根底にあるものは、人間の問題性に関わっており、この方が絶えず私たちと共におり、哀れみ深くかかわり続けていてくれ、人に大切にされたいと思うように人に接することで、人間の問題性から抜け出すことが出来るという事である。

・質疑応答

高橋:幼少期に父に厳しく怒られたことが二度あったと言われていたがそれはどのようなことで怒られたのですか。

中川司祭：ともに人に失礼な事、人を傷つけるようなことをしたとき厳しく怒られた。

祖根：人に手を差し伸べるのはとても難しく感じるが、どうすればできるようにできるのでしょうか。

中川司祭:注意深くあることがまず大切です。脳科学などでもMindfulnessという態度、即ち、物事に、現在に、注意深くある事が、過去や未来への囚われをなくし、他者とのコミュニケーションをより深いものにすることが出来る。現代の人は思考の約半分を過去と未来に関することに費やしており、現在に集中していないという研究結果がある。

平成29年度会報
～宮城さんのお話し／マタイの福音書第16章13節から～

法学部３年　祖根昂大

1. 日時：2017年7月23日(火)　19時30分～21時
2. 場所：YMCA一橋寮　1階食堂

まず、自己紹介。

マタイの福音書第16章13節～17節。ピリポ・カイザリアはユダヤ人少ない、イエスは有名人の場所、イエスは異教の神。

イエスの質問には様々な答えが（弟子たちには様々なノイズが）→イエスはそれらの一角。しかし、正しい答えは一つ。15節「“あなたがたは”だれだと思うか」。中途半端にはできない。“あなた”の想いは？この質問は今も続く恒常的な質問。聖書を貫く大切な質問。“あなた”の信じるものは？

宮城さん「クリスチャンになったのは中学生。小学校時代は野球少年、野球＞キリスト教。信仰は親のものを借りている感じ。中学校時代は週末教会。最初はあまり好きでない（この教会ではアメリカ人が多い。アメリカ人にも日本語話してほしい。）しかし、その場の宣教師が丁寧に話しかけてくる。ふと、何故彼はこんなに真摯なのか。ここから、聖書への壁が低くなり始め、聖書を自身で感じ始める。ここで上の質問に出会う。この頃から自身はクリスチャンかと思い始める。気付いたらクリスチャン（多くの人はクリスチャンになる契機がある）。大学受験期、東さんを知る（会ったことは無い）。彼からYMCA寮を知り、一橋受験を決意。受験の日、東さんの部屋で寝る（初遭遇）。大学合格後、入寮。寮での一番の経験は、クリスチャンとノンクリスチャンの混在した聖書研究。最初はクリスチャンのプレッシャーがあったが、途中から知らないことを受け入れる。寮生が真摯に聖書研究をしていて感動。寮での聖書研究ならではの疑問が、再度聖書に向き直す契機に。わからないことに気付き、もっと深く聖書に信頼を置くようにもなった。」

宮城さん「上の質問の答えは、“日々の選択”。シモン・ペトロはカッコいいこと言っているが、後に知らないと言う。彼ですらそう。自分もその程度の人間。」

皆さんの聖書への向き合い方は？聖書を信じている人もいるということを意識して。聖書研究で一番重要なのは、自分。自分のスタンスが大切。

宗教は価値観。社会を見るレンズ。どのレンズを選ぶか、宮城さんは聖書というレンズ。他の人はまた違うレンズ。人はそのレンズを持ち生きている。選択の違いはここから生まれる。社会に生きる上での道徳・法、自身の基準がある。人生の意味。意味を見つけることが大切。見つけるセンス。それの鋭さが重要。宮城さんは聖書から見つける。

24節、イエスに従うとは。ここの記述は現代に逆行。現代は“自己実現”。聖書の記

述は古めかしいものなのか。違う。イエスに従う覚悟、得るものがある。ノンクリスチャンは楽そう。しかし、クリスチャンだからこそ得られるもの。

26 節。成功とは？現代に考えられる成功は、それが全てか？善きサマリア人の例え、隣人愛。君らは世の中で成功するだろう。しかし、それだけでいいのか。周りの人への隣人愛の実行。生きる意味を考えること。それらが大切。

～質問・感想～

大：自分の人生の目標は主観的。結果は客観的。

宮：客観は時と共に変わる。しかし、聖書は一貫した価値観。時と共に客観が変わるのは人間的。しかし、自分は一貫した聖書を信じる。

伊：クリスチャンとノンクリスチャンの混在はやはりクリスチャンのテーマ。宮城さんのお話しは共感できる。

ブ：どうしてイエスにしかない意味があると思いますか？道が一つというのはどう思いますか？

宮：イエスの示される道が一つしかないのは確かに非寛容。しかし、それを示してくださっているからこそ信じられる。正しいとは常に一つ。それを示してくださっている。

宮：一年生どう？（笑）

ま：今まで聖書に触れたことが無かった。今回のお話しでは、時代的な価値観の違いはあるのは確かにと思った。聖書研究は一価値観を学んでいる感覚。

北：自分はフィーリングで生きている。

∵：自分のスタンスを持つことは人との衝突を生むのでは？その衝突が生じたときはどうすべきか？

宮：スタンスを変えるのはむしろ普通。その方が生きやすい。しかし、成功者は貫いた人。自分はキリスト教に関する事柄は絶対曲げない。一方で、衝突時に曲げるというのもある意味スタンス。しかし、曲げて・妥協して辿り着いた結果で満足するのか？

瀧：麻雀のリーチじゃん？

宮：麻雀わかんねー（笑）

宮内：夏季ゼミのテーマは視点を変える。夏季ゼミでは今回のお話し（レンズ）を参考にしたい。

池：高校生の時の先生は、他人（著名人）の考えを自分の考えとする人だった。それは楽なことで、自分の考えを持つことはある意味で苦だと思いました。

学生時代からキリスト教への考え方は変わりましたか？もう一度キリスト教への想いを教えてください。

宮：まず、自分にとってのキリスト教とは生き方。そして、やはりキリスト教は一貫したものなので、学生時代から考え方は変わらない。

氏：善きサマリア人の話はラザロの話に似ている。聖書には共通した箇所が多くあるなと思いました。

YMCA 一橋寮大規模改修計画の概要と進め方

YMCA 一橋寮再建企画委員会委員長・岩谷滋雄

２０１６年６月の総会で設立された YMCA 一橋寮再建企画委員会のその後の活動状況についてはご存じない会員諸氏が多いと思うが、何十年に一度しか行われない計画が進んでいるので是非皆様にもご承知いただきたく、ここで寮再建に関する見解、基本方針、そして今後の進め方がどのようになっているか、簡単にご紹介する。以下は委員会メンバーの概ねのコンセンサスが得られているものではあるが、私の個人的見解も含まれていることをお断りする。これを読んで、出来るだけ多くの方に問題意識を持っていただき、今後の委員会の作業に参画していただけることを期待している。

１．背景

YMCA 一橋寮は、１８８７年（明治２０年）と言われる東京商業学校 YMCA 発足の当初から構想されていたが、米国人 YMCA 指導者 J.R.　モット氏からの多額の寄付を得て、１９１０年（明治４３年）神田美土代町に建設されたのが最初である。それ以来場所や建物は変わっても一貫して維持され、１００年を上回る歴史があるが、その間一橋大学のキリスト教研究文化サークルの活動拠点として日本の産業界を始め各界に秀逸な人材を輩出してきたことは御承知のとおりである。(「一橋基督教青年会―百年史―」参照。)

１９３５年（昭和１０年）に現在の地に初代の寮が建設され、その後１９７９年（昭和５４年）に同じ地に新築された今日の YMCA 一橋寮は、当時の厳しい財政事情に鑑みれば最善の住環境を提供する施設として再建に当たった当時の関係者の英知と努力の賜物と高く評価されたものであったが、約４０年近い歳月の経過の中で劣化が進み、住環境としても、またクラブ活動の拠点としてもその使命を十分に果たせない状況に立ち至っている。

長年の懸案であった一橋大学基督教青年会の公益財団法人化が成った今、次に着手すべき喫緊の課題はこの劣化した状態にある YMCA 一橋寮をその伝統と使命に相応しい寮舎に改築することである。

２．基本的見解

社会で役立つ実学の教育を専らとする一橋大学において YMCA の果たすべき役割は学生達にキリスト教精神を体得させることを通じてしっかりした人生観、世界観、そして倫理観を養う機会を与える、もって大学自体の与える教育と相俟って多難な人生を生きていくための十全なる人格の形成を可能にすることにある。上記百年史には明治前半期の発足以来他大学よりも活発に活動していた事実が記録されているが、恐らく商法講習所発足当初からW.C. ホイットニー氏のような米国人クリスチャンの簿記専門家の指導

を受けたためではないかと想像する。昨今の日本の大手企業における粉飾決算や欠陥製品対策の遅れ、倫理観の欠如した政治家の振舞い、等を見るにつけ、この一橋大学 YMCA の存在意義は今日の日本においても決して薄まっていないことを確信するものである。

上記の目的を達成するための有効な手立てとして一橋大学 YMCA は他の幾つかの大学 YMCA と同様、寮における共同生活を行うことを伝統としてきた。即ち、寮は思索、祈り、読書等を通じる文学・芸術を含むリベラルアーツの学び、心のうちをさらけ出すような討論、といった高度な知的・感性的活動を行う場であり、それにふさわしい設備と雰囲気を有するものとすることができれば、上記目的を達成するための極めて効果的な道具立てとなることは明らかである。最近シェア・ハウスやグループホームが評価されているのもこのことの傍証になると考える。

３．具体的方針

より具体的には、寮生の日常活動である朝拝や聖書研究会のみならず、公益法人化が成った今、年６回程度は行われるべき OB との交流討論会、年数回の広く大学関係者や地元地域住民を招いた講演会・討論会（小平際・一橋祭参加を含む)、コンサートや歓送迎会などの親睦文化行事、が行える場を備えると共に、昨今の学生の要求水準に見合うような、小平の学生寮などの競合する施設に比べても見劣りしない快適で魅力的な諸設備を備える必要がある。

個人個人に落ち着いた環境を提供する観点からは引き続き原則個室とすることが望ましいが、一方において寮生が自分の部屋に閉じこもって孤立してしまうことがないよう、自然発生的な交流が生じ、親密な人間関係に繋がっていくことを容易にするような動線を確保するなど、シェア・ハウス的要素も取り込むべきである。その意味で談話室の設置も望まれる。この寮の日常的な維持管理は寮生の自治によることとしており、その観点からも寮生間の協力・協調が容易に行われうるような住環境とすることは当寮の持続可能性を確保する上で必須の要請とも言える。

また、YMCA の性格上伝統的に男子学生しか受け入れないこととしてきたが、今や一橋大学の学生の３割を占めるに至っている女子学生を排除することは最早時代にそぐわないと言わざるを得ず、女子を受け入れるための手立ても考える必要がある。

寮母の存在は寮生達の母親代わりとして家族的な雰囲気の醸成に多大の好影響をもたらしてきたところではあるが、寮内に同居でき、クリスチャンでもある寮母を見出すことは昨今極めて困難となりつつある。一方において、公益法人化がなった今、法に則って帳簿類等を整備し、併せてその趣旨に沿った活動を活発化させるために常務理事を置き、そのための事務室を確保することは不可欠の要請である。予算及びスペースの制約等を考慮すると、この際寮常駐の寮母を置くことはあきらめ、通いの寮母かケータリング会社による平日夕食のみの提供を原則とし、空いたスペースで常務理事の事務室を確保することが適当と考えられる。併せて、シェア・ハウス的雰囲気の醸成のためにも

台所は同時に数人の寮生達が利用できるようにすると同時にパーティの準備にも利用しやすいような造りとすることが望ましい。

この結果として、寮生の監督・指導は寮母に代わって常務理事が行うこととなる。また、ゲストが臨時に宿泊できるような部屋も確保できれば理想的である。

出来る限り日本の木材を多用し、再生可能エネルギーの取り込み等環境に負荷をかけず、光熱費の節約にもつながるような建物とすべきであることなどは言を俟たない。

４．いくつかの前提と制約

平成１７年の耐震診断の結果によれば現存の建物は適切な維持管理を行えば今後３０年前後の使用に耐える躯体を有しており、現行法の要求水準を満たす耐震構造となっている。従って、当初取り壊し・建て替えの案もあったが、この躯体を基本的に維持しつつ、その大幅改修と若干の増築によって上記の目的達成を目指すこととする。ちなみに、この建物は建設当時はやりの「モダニズム」様式で建てられており、築後５０年を経過すれば「登録文化財」の指定を受けることが可能とのことである。これにより具体的なメリットが生じる訳ではないが、この建物に「箔」を付ける意味はあるのではないか。

建設資金は一橋大学 YMCA 会員の寄付を中心とする浄財で基本的に賄うこととし、現時点の寄付の受け付け状況と今後１年間程度以内に期待される追加的寄付を合わせ、現実的な予算額として８千万円を想定する。但し、募金目標金額の達成状況及び工事の見積金額によっては、当方が希望する大規模改修工事の全ての工事を実施できないことが当然想定されるので、工事契約等工事の具体的な実施及び進め方については、段階を設けるなどにより資金に見合った弾力的な実施を行うことにならざるを得ない。但し、最終的な出来上がりの姿は最大限上記基本方針に沿った魅力的なものとすべきである。

敷地内に賃貸アパートを建設することは多々問題があるため行わない。駐車場については、引き続き貴重な収入源として維持することとするが、場所については建物の北側に移す等により収容台数を増やすと共に寮の表側の美観改善を図ることとする。移設費用については駐車場管理を管理会社に委託することを約束するのと引き換えに管理会社に負担してもらう、という方式も検討する。

女子用の部屋については改造費用の増大を回避するため隣接する住宅を借り受けて利用する可能性を探求する。これが困難である場合、現建物を東方向に拡大する可能性も検討する。

前回再建の際に生じたと言われる「伝統の断絶」を回避するため工事は出来る限り寮生の居住継続を妨げないようにしながら行うこととする。完全退去が不可避な場合であってもその期間は必要最低限にとどめ、夏休みの時期に合わせるなどの工夫をするものとする。

５．今後の進め方

本格的なコンペの実施は建築には素人の集まりである寮再建企画委員会の手には余り、経費的にも小さくない負担となることが予想される中、儀賀裕理理事のつてで、ミームズ一級建築士事務所の田代洋志代表が候補者として浮上した。同氏はクリスチャンであり、日本基督教団根津教会及び大磯教会の改修で高い評価を得たという実績もあり、再建企画委員会として好印象を持つに至った。そこで、同氏と別のもう一社から基本計画作成作業に関する案を提示してもらい、比較検討した結果田代代表のアイデアと高い熱意を評価して、同氏に基本計画作成作業を委託することとし、６月２４日の理事会・総会の承認を得た。その後、６月３０日には当青年会と同氏の間で覚書を締結し、作業が開始されたところである。

併せて、それまではっきりしていなかった再建企画委員会の構成については、私が委員長、堀地史郎、宮岡五百里、渡辺徹、齋藤金義、儀賀裕理、加藤順、西浦道明、安藤誠の各氏とその他有志の方を構成員とするということで理事会・総会の了承が得られた。

今後田代氏と再建企画委員会と大城寮長以下寮生各位の共同作業で１０月末完了を目処として基本計画作成作業が進められることになる。その後は、基本設計、施工業者選定、詳細設計、施工、と進み、並行して募金活動を行い、全てが順調に進めば来年秋には完成予定である。

６．お願い

会員各位からの貴重な寄付を利用して実施される今回の大規模改修プロジェクトの中身は、１０月末まで行われる基本計画作成作業の中でほぼ固まってしまうということになる。従って、私としてはこのプロセスに出来る限り多くの会員の方に関与して欲しいと願っている。この作業は主として国立の YMCA 寮で土曜日か日曜日の午後に行われることになるので、その日に国立に来るのにさほどの困難のない方、そしてこの種のプロジェクトに関与した経験をお持ちの方や建築に関する契約の実務に詳しい方などは特に、委員会の「有志」メンバーとして参加していただければこれほど心強いことはない。それによって若手から古老会員まで全ての世代の意見が反映されれば更に理想的である。我こそはと思われる方は私までご一報いただければ幸いである。ご質問・疑問の提起も歓迎する。（メールアドレス：shigeo-kkm@m08.itscom.net）

理事会だより

2017年6月24日、如水会館けやきの間において、2016年度定時総会が開催された。
また、定例総会等の一連の会議の前に、午後1時15分から2時45分まで、記念講演会が開催され、神奈川大学名誉教授山本通氏が、「近代資本主義形成の精神的支柱」の演題で、資本主義がヨーロッパで形成されたその精神的な支柱が何であったか、マックスウェーバーのプロテスタントの倫理と資本主義の精神を主題に、それとは異なる角度から様々に検証された大変興味溢れるテーマでお話を頂き、OB は勿論、寮生の諸君も大いに刺激を受けた良い講演であった。

評議員：堀地史郎、岩谷滋雄（なお、評議委員会は定数不足のため改めて6月29日11時に開催した)。
理事：齋藤金義理事長、渡邊徹、山本通、中村正俊、儀賀裕理、加藤順、縄田克之
監事：西浦道明
OB：川浦秀之、宮城康智、岡田健太朗、岡本政之、寮生：1年生：高橋正幸、北田志聞、2年生：菊岡義洋、前田雄飛、星一樹、川畑輝、３年生：大城幹雄、川村勇太、祖根昂大、建内瑛貴、三品直輝、４年生：小谷悠樹、仁藤将史、山田哲也、氏家和子寮母

報告事項
2016 年度事業報告
1．事業施策
（１）　YMCA 一橋寮の運営
2016 年度の新入寮生は 4 名が入寮したものの、１年生１名が途中退寮し、新たに１名の１年生が入寮し、１６名の寮生が聖書研究会はじめとする YMCA 活動を行った。３月に４年生４名が無事就職し寮を巣立っていった。
（２）聖書研究会、講演会及び修養会の実施
ア）聖書研究会　毎週火曜日の夜 7 時から聖書研究会を開催（2016 年 4 月～12 月）
講師は、引き続き昨年度と同様、国立教会牧師宮嵜薫先生及び南大沢チャペル教会水口功牧師が行った。
（イ）特別聖書研究会（半日修養会）
２０１６年１０月に伊藤淳カトリック清瀬教会主任司祭（当会 OB)
１２月にカルメル会司祭中川博道神父により、特別聖書研究会が実施された。
（ハ）OB 講演会 2016 年 6 月の総会当日、元理事長・現在評議員会会長の堀地史郎氏が「私の歩んだ足跡」と題して講演会が実施された。
（３）ＯＢと学生との交流会の開催

（ア）2016 年 12 月 23 日 OB・寮生合同クリスマス会が実施された。その前に、寮生だけのクリスマス会が行われた。
（イ）9 月 1 日の公益法人認可を受けて、クリスマス会において公益法人化祝賀会を併せて開催した。祝賀会としては、鈴木茂明氏の指揮によりコーロソフィア合唱団がクリスマスの典礼聖歌を奉唱した。また、クリスマス祝会に先立って、公益財団法人日本 YMCA 同盟総主事の島田茂様に、演題「「弱くされた人々と共にーイエス・キリストに導かれしＹＭＣＡー」の講演を頂いた。
（ウ）予餞会：2017 年 3 月には、如水会記念室西において、卒業する４名と寮生、OB と予餞会を行った。
大崎友裕：農林中央金庫、田村勝裕：新日鐵住友金属、二瓶琢也：三菱 UFJ 国際投信、高橋純平：東北電力株式会社
（エ）会報の発行は、７月号は寮生による編集、１２月号は山本通編集長のもと、OB 編集委員として川勝高宏、杉山晶彦、中村研太各氏により発行された。
（４）国内外 YMCA 等との交流
（ア）アジア経済金融問題会合同 Field Study
2016 年 9 月、寮生４名の参加、シンガポール、香港各 YMCA、シンガポール大学、AMRO、GIC、国信証券、あおぞらアジア現地法人、香港中文大学を訪問
（イ）中国学生との交流会（日本での）
中国人民大学及び上海財経大学の学生及び担任教授との交流会及び英語による討論会の実施

2016 年度貸借対照表、財産目録、正味財産増減内訳表について
2017 年 7 月から、公益財団法人一橋大学基督教青年会のホームページを立ち上げているので、計算書類、2017 年度事業収支予算書、2017 年度事業計画あるいは法人の役員名簿等については、ホームページを参照してください。会報には 2017 年度からは掲載いたしません。
http://hitotsubashiymca.or.jp/

なお、正式な評議員会は、6 月 29 日 11 時から如水会の会員会議室において開催され、2016 年度の正味財産増減内訳書、2017 年 3 月末貸借対照表、財産目録について、承認され、また、常務理事に安藤誠氏が 2018 年定例評議員会開催時までの任期で選任されました。

編集後記

商学部２年　菊岡義洋

会報の作業も残すところあとわずかとなりました。寮の改築や公益財団法人化などがあり、ここ数年はこれまで以上に寮にとって大きな意義をもった時期であると思います。このような時に会報担当として寮のことに携われたのは本当に恵まれたことであり、大変良い経験が出来ました。そして、何より会報作業を通して寮や寮生のことをより知ることができ、これから残りの寮生活を送る上でも大変意義のあることであったように思います。

正直なところ、寮生活を始めてから１年ほどしか経っていないときに会報作業を任されたときは、学業や部活動との両立が出来るか不安にもなりました。しかしながら、ＯＢだからこそできるような助言をしてくださった斎藤理事長や、経験を生かして助言してくださった前年度、前々年度会報担当者の川村さん、小谷さん、そして会報に対して有益な意見をくださった寮生の方々のおかげで何事もなく会報業務を終えることが出来そうであり、皆様にはこの場を借りて心からお礼申し上げたいと思います。この会報が寮とＯＢの更なる交流のきっかけになれば大変喜ばしいです。

会報第67号	一橋大学基督教青年会会報 第67号
発行日	2017年7月10日
発行者	公益財団法人　一橋大学基督教青年会
発行者住所	186-0002東京都国立市東1-20-12 YMCA一橋寮
電話	042-843-0542
HP Adress	http://hitotsubashiymca.or.jp/
銀行口座	三菱東京UFJ銀行本店 普通預金 (1)普通口　0680004 (2)建設口　0868291 公益財団法人　一橋大学基督教青年会
発行人	理事長　齋藤金義
編集人	菊岡　義洋
印刷・製本	ゴトー印刷　☎042-576-9572